



The First International Conference on Gastroenterological Carcinogenesis in conjunction with the Sixth Hiroshima Cancer Seminar October 22-24, 1996, Hiroshima, Japan

招待講演者、シンポジスト、座長、組織委員の集合写真

括が行われた。

第一回消化器発癌国際会議の開会式は、藤田雄山広島県知事(代理)中谷比呂樹県福祉保健部長、平岡敬市長ならびに阿部薫国立がんセンター総長を来賓に迎えて行われた。

田原組織委員長の開会の辞と大原会長の挨拶に続き、来賓からの歓迎の辞と祝辞があった。特に、地元広島を代表して平岡市長が「世界から注目される本国際会議が、被爆都市広島で開催されることは意義深いことであり、がん医療進歩への期待とさらには世界平和への貢献を祈念する」と述べられた。

引き続き二題の基調講演が行われた。まず、国立がんセンター研究所長の寺田雅昭博士(国立がんセンター杉村隆名誉総長代理)が「消化管の実験化学発癌」について講演した。ニトロソ化合物による実験動物における胃癌、大腸癌の作成、食物由来するヘテロサイクリックアミンによる発癌性、発癌過程における遺伝子異常について述べた。また、緑茶成分やモンシロチョウの体液成分による癌の発生、増殖の抑制についても言及した。

次に、テキサス大学のフィドラー教授が「癌の転移能」についての講演を行った。大腸癌細胞株では、サイトカイン、増殖因子の発現の違いによって転移能に差異があること、実際の大腸癌症例におけるbFGF(注1)とEGF

受容体(注2)、細胞接着分子カドヘリンなどの、発現と転移・予後が関連することが示された。

午後六時から本国際会議の歓迎レセプションが会議場内で行われ、来賓、招待講演者、一般参加者等約二五〇名が出席した。田原組織委員長、大原会長の挨拶のあと、藤田雄山知事およびテキサス大学のフィドラー教授からの祝辞があった。また、米沢傑教授(鹿児島大学)のオペラが披露された。

一日目：がん発生のメカニズムから治療まで

第二日(十月二十三日)の午前の特別講演では、ウイスコンシン大学のピトー教授が、「消化器癌発生過程における特徴」と題して特に肝癌の発生過程における形質発現、形態変化とさまざまな染色体および遺伝子異常について概説した。

午後には、東京大学医科学研究所の中村祐輔教授が、「ヒトゲノム解析を通じた癌関連遺伝子の単離」について特別講演した。癌関連遺伝子を単離する方法を三通り紹介し、それぞれのアプローチで単離した増殖因子受容体関連遺伝子、転移関連遺伝子および癌抑制遺伝子p53(注3)によって発現が誘導される新しい遺伝子について報告した。

大原会長による会長講演は、「胃癌および大腸癌の組織発生と治療」と題し

第1回消化器発癌国際会議の開催



基調講演後、フィドラー教授への記念品の贈呈(左：田原組織委員長)

文
写真・安井 弥
(Yasui, Wataru)
医学部第一病理学助教授

世界初の国際会議

一九九六年十月二十二日(火)から二十四日(木)までの三日間、広島国際会議場で「第一回消化器発癌国際会議」ICGC(Gastrointestinal Carcinogenesis Conference)の開催された。

世界の二十八の国と地域から癌研究者および癌専門医六〇〇名以上が参加し、「消化器癌の発生・進展の分子機構、診断・治療・予防」を主要テーマに、四〇〇題以上の研究発表と討議が行われた。

本国際会議開催の母体となった「日本消化器癌発生研究会(会長：大原毅東京大学第三外科教授)」は、縦覧的発想のもとに、消化器癌の発生を究明し制癌の道を拓くことを目指して一九八九年に設立されたもので、毎年研究会を開催し、会誌「消化器癌の発生と進展」を刊行するとともに、優秀論文を米国癌学会誌「Cancer」の増刊号に掲載している。

一日目：がんセミナーと発癌と転移についての基調講演

本国際会議の内容を紹介すると、第一日(十月二十一日)は、第六回広島がんセミナー国際シンポジウムと第一回消化器発癌国際会議開会式及び基調講演が行われた。

第六回広島がんセミナーでは、テーマとして「癌細胞と間質との相互作用」Cancer-stromal Interaction)をとりあげ、ルードヴィッヒがん研究所のブレンターニ博士、オックスフォード大学のタリン博士、昭和大学腫瘍分子生物学センターの黒木登志夫教授など、国内外の八名のシンポジストが、癌細胞と間質との相互作用に関する最新の研究成果を報告した。

ここでは、糖鎖の修飾異常による癌細胞の形質の変化、胃癌における炭水化物結合蛋白及びその糖性抱合体の発現と分化誘導、サイトカインによる消化管癌と間質細胞との相互作用、宿主因子による悪性細胞の形態変化、胃癌の浸潤・転移と細胞基質分解酵素、情報伝達系による扁平上皮の分化、CD44遺伝子異常発現の解析による消化管癌の診断、癌における遺伝子増幅、についての発表があった。

最後に、テキサス大学のロターン教授から「癌と間質との相互作用」の総

て行われた。胃癌の発生母地としての再生上皮・腸上皮化生の重要性和組織型別の治療、大腸癌の発生経路に関する de novo (注4)の重要性和生物学的態度等について、これまでの研究成果が発表された。

この日から七会場に分かれて、シンポジウム、一般講演、ポスターセッションが始まった。

この日のシンポジウムは、「肝発癌」「大腸発癌」「胃発癌」「膵臓発癌」であり、遺伝子異常を含む癌の発生のメカニズムから治療に至るまでの、広い範囲に及ぶ研究成果の発表と討論が行われた。

一般演題は、実験発癌、発癌の分子機構、浸潤と転移、癌の生物学、遺伝子診断・治療などについてであり、特にポスター発表は、ポスターディスプレイ

ション形式とし、活発な意見交換が行われた。その他ランチョンセミナーと、「化学療法と消化管癌の遺伝子異常」、「ヘリコバクターと胃癌」に関するサテライトシンポジウムが行われた。

三回目…いろいろな実験成果の報告と、「銀河」でのお別れ会

第三日(十月二十四日)は、午前と午後二題の特別講演が行われた。

まず、ヴァンダービルト大学のモーゼス教授は、「TGF β (注5)の効果」とりあげ、乳腺の発生・分化および乳癌をモデルに講演した。その中でモーゼス教授は、乳腺の分化には、TGF β が重要であることをトランスジェニックマウスの系を用いて示し、乳癌細胞にTGF β を遺伝子導入することにより、TGF β が癌の発生は抑制するが、逆に癌の進展には促進的に働くことを明らかにした。

ロズウェルパーク研究所のミチチ博士は、「癌の免疫と化学療法」について特別講演した。これまでに蓄積された制癌剤と免疫応答に関する知見をふまえて、アドリアマイシンとIL2(注6)あるいはTNF α (注7)との併用の有効性とその機序について述べた。

シンポジウムは、「食道発癌」「胆道発癌」「実験発癌」であり、食道、胆道の癌について、癌遺伝子、癌抑制遺伝

子、遺伝子不安定性、細胞周期調節因子等の異常と発癌との関係、疫学、治療に関する発表・討論が行われ、また、さまざまな実験発癌系から得られた成績が報告された。

一般研究発表は、消化管発癌、遺伝子異常、テロメラゼ、疫学、新しい治療、予防などについて行われた。全会場の発表が終了後、田原組織委員長

の閉会宣言で幕を閉じた。フェラウエルバンクが瀬戸内海汽船「銀河」で行われ、約一〇名が参加した。夜空と海に浮かぶ厳島神社の美しい風景をバックに、船上では世界から集まった研究者同士でフランクな会話が交わされ親睦を深めた。三日間開催された本国際会議は盛会のうち

臨床にフィードバックさせるために

本国際会議の目的は、消化器癌の発生・進展に関し、胃癌、大腸癌などのそれぞれの臓器の枠にとらわれることなく、同一個体に発生する癌として全体像を把握し、癌の診断、治療、予防に還元することであった。

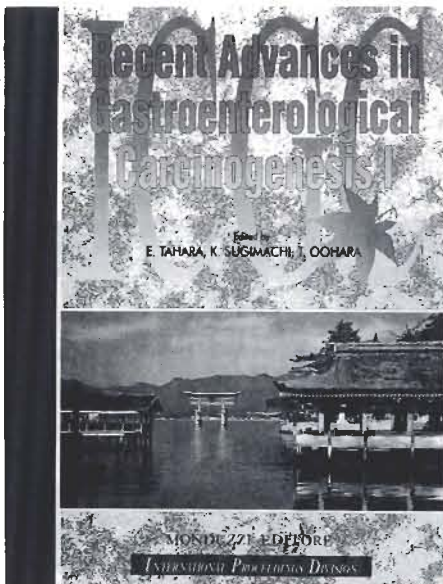
本国際会議に、世界の癌専門医と癌研究者が消化器癌の発生機序の解明のもとに参集し、先端的な基礎研究を癌の臨床にフィードバックすることを目指して、発表・討論を行ったこと意義はきわめて大きい。本国際会議の成

果を踏まえ、癌の発生と進展のメカニズムに基づいた治療が行われ、さらに癌予防へ応用されることが期待される。

なお、会期中に行われた国際組織委員会において、「国際消化器発癌学会(International Society of Gastroenterological Carcinogenesis)」を設立することが決定され、その準備委員長に田原教授が就任した。

第二回国際会議は一九九八年にウルム(ドイツ)で、第三回国際会議は二〇〇〇年にオックスフォード(英国)で開催される。

(注1) bFGF basic fibroblast growth factor 塩基性線維芽細胞増殖因子
 (注2) EGF 受容体 epidermal growth factor 表皮増殖因子受容体
 (注3) 癌抑制遺伝子 p53 欠失・変異等で不活化することにより癌化に関与する遺伝子の代表で分子重33キロダルトンの蛋白をコードする。ヒト癌で最も高頻度に異常が見出されている。
 (注4) de novo 直訳すると「新たに」となるが、この場合「腺腫を経ない癌化」のことをいう。
 (注5) TGF β transforming growth factor β トランスフォーミング増殖因子 β
 (注6) IL2 interleukin 2 インターロイキン2
 (注7) TNF α tumor necrosis factor α 腫瘍壊死因子 α



研究内容をまとめて発行された「Recent Advances in Gastroenterological Carcinogenesis I」